

推理小説を読んでいたら、万金丹の話が出てきた。それを見た時、小さい頃父親に聞かされた、笑い話を思い出した。

私が、まだ生まれていない時代の出来事だ。

父が冬の雪山に分け入り、薪木きりに出掛けた。生家から雪を掻き分けながら、徒歩で一時間以上もかかる。馬に跨って行く時もある。

途中炭焼き小屋があつた。炭焼き窯は、逆V型に組んだ茅葺き屋根の下にある。窯の前は暖かい、真冬でも薄着で仕事が出来る。

小屋の前に来ると、焼き子の爺さんが、窯場の前で屈み込み、「うんうん」と唸っている。父が「どうしたんだ」と聞くと、

「急に腹が痛くなって困った」と言い苦しそうだ。

父は「俺が何時も持ち歩いている、よく効く越中富山の万金丹があるから飲ませる」と弁当箱をあけ、手早く、鼻くそ、耳糟、ご飯粒、梅干の皮を少し混ぜ、二粒の万金丹らしいのを作った。

爺さんは下を向いて痛みを我慢していたから、ヘンテコな薬とは気が付かなかつたらしい。

父に万金丹を飲ませられ「よく効く薬だから直ぐ良くなる」と暗示をかけられた爺さんは、父に頭を下げた。

夕方炭焼き小屋に寄つてみると、腹痛も治まり元気に働いていた。父も万金丹の効き目には吃驚したと言っていた。

翌日爺さんは炭二俵背負つて父の元にお礼に来た。一俵は四貫目(十五キロ)今の値段にすると、二俵で一万円位する。

私達子供の頃、歌のような節回しで、こんな歌(?)を口はしっていた。

“越中富山の薬屋さん、鼻くそ丸めて万金丹”

“それを呑むやつアンポンタン”

子供だけでない、大人も言っていた。日本中何処でも知っている風刺な歌だったかも知れない。

父は信ずれば、禍も福となるものだ、と話していた。

炭焼き小屋の爺さんに飲ませた万金丹の話は、父の作り話だったかもしれないが、父の性格から納得できて、呆れる、父の思い出だ。